



Title	旧南洋群島に残存する日本語の動詞の文法カテゴリー
Author(s)	渋谷, 勝己
Citation	阪大日本語研究. 1997, 9, p. 61-76
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/9496">https://doi.org/10.18910/9496</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 旧南洋群島に残存する日本語の 動詞の文法カテゴリー

Second Language Maintenance:  
the Case of Japanese Verbs in Palau

渋谷 勝己  
SHIBUYA Katsumi

キーワード：第二言語の維持 パラオ 単純化 動詞の文法カテゴリー

### 1. はじめに

東はミクロネシア連邦共和国のクサイエ州から西はパラオ（ベラウ）共和国に至るまでのいわゆる旧南洋群島には、現在（でも）日本語を流暢に話すことのできる人々が暮らしている<sup>1</sup>。1919年に南洋庁が設置されてから1945年に終戦をむかえるまでの間に、さまざまなかたちで日本語教育・日本化教育を受けた現地の人々である。

大阪大学文学部日本語学講座を中心とするプロジェクトチームは、1994年度から1996年度までの三年間、この地をフィールドとして、現在に至るまでの日本語・日本文化の受容、維持、変容のありかたなどを調査した。本稿は、パラオ共和国の人々の話す日本語を対象として行った記述調査のなかから、動詞の文法カテゴリーの分化の状況を整理した結果を報告するものである。これは、渋谷（1995b）や由井・渋谷（1996）のように、今後、個々の文法カテゴリーに見られる問題を個別的に分析していくための、いわば序論的な、また鳥瞰的な見取り図に相当するものであり、あわせて問題のありかを指摘することをもくろむものである。

### 2. 調査の概要

以下に、本稿で用いるデータを収集するために行った調査の概要を記す。

- (a) 場所 : パラオ (ペラウ) 共和国
- (b) 調査期間 : 1994年8月13日～28日、1995年7月29日～8月18日
- (c) 調査者 : 崎山理・由井紀久子・渋谷 (1994年)、渋谷 (1995年)
- (d) 調査法 : 被調査者一人一人に個別的に面接し、その談話を録音した。話題は公学校での教育、日本時代の思い出などが中心である。
- (e) 被調査者 : 戦時中に日本語教育を受けた、60歳以上 (調査時) の老年層男女。本稿では、日本語能力を異にするとされる以下の5名の談話資料を分析の対象とする (左から、被調査者略号 : 性別・年齢 (調査時)・学歴 (データ量))
  - L : 男性・年齢不詳・公学校本科/補習科 (45分弱)
  - A : 女性・70歳 (?)・公学校本科/補習科 (45分)
  - T : 女性・64歳 (?)・公学校本科/補習科 (45分)
  - M : 女性・66歳・公学校本科/補習科 (45分)
  - Y : 男性・61歳・公学校本科 (45分弱)

なお、戦時中にこの地においてどのような日本語教育が行われたか、また学校以外にどのような日本語習得環境があったかといった、習得を取り巻く条件の詳細については、本稿では取り上げない。渋谷 (1995b)、由井・渋谷 (1996) を参照されたい。

### 3. パラオの日本語における動詞の文法カテゴリー

まず、分析の対象とした被調査者の、主文末に相当する発話末641例に現れた動詞の文法カテゴリーとその形式、用例数をまとめてみよう。表1、表2のようになる。表1は丁寧体、表2は常体が用いられた場合である。発話数は最も少ないA (102) から最も多いL (160) まで幅があるが、これは、各被調査者の日本語能力を反映した数字であるというよりも、調査した状況などの外的な条件に左右されたものと考えるほうが妥当である。なお表に示した形式は、代表的な形式であることに注意されたい。「のだ」の具

現形にはノダやンダやノがあり、文末詞として用いられた形式にはヨだけでなくカ、ネ、ヨネなども含まれている。また、それぞれの形式の分類枠およびカテゴリー名も、日本語母語話者の用いる日本語についてのものを、便宜的にそのまま当てはめたものにすぎない。したがって表1・表2に例示した形式が日本語母語話者の用いるそれと形・意味・用法においてすべて同じであるとは限らない。その他、表にまとめきれなかった形式については、表の右に「その他」として、被調査者ごとにその形式を示した。

次に、表1と表2に現れた形式の使用度を個人ごとに整理すると表3のようになる。

ちなみに5名の被調査者が用いた動詞の異なりは全部で181語であった。そのうちそれぞれの被調査者が用いた動詞数は、表2の最下段に示したように、L108語、A68語、T65語、M54語、Y46語であり、そのなかでそれぞれの被調査者だけが用いていた語はL52語、A23語、T15語、M10語、Y12語；逆に5名すべてが用いていた語はアル・行ク・来ル・住ム・スル・卒業スル・使ウ・デキル・取ル・ナル・話ス・見ル・ワカル・忘レルの15語であった（存在のイルはTが丁寧体でオリマセンを専用しているために入っていない）。なおこれらの動詞の文法的な特徴については、以下で若干触れるところがあるものの、今後、活用、格、ヴォイス、テンス・アスペクトなどについて個別的に分析を進める際に考察していく予定であるので、本稿では取り上げないことにする。

以下、発話例を交えつつ、次の順序で考察していく。

- (a) 聞き手配慮に関するカテゴリー：丁寧体と常体・文末詞 (§3.1)
- (b) 命題内容に関するカテゴリー：極・ヴォイス (§3.2)
- (c) 命題の捉え方に関するカテゴリー：

説明のムード・判断のムード (§3.3)

以下の記述においては、日本語母語話者の用いる日本語と比較した場合に、あるいはレベルの異なる被調査者間の文法能力を比較した場合に、どのような点に単純な構造や体系が観察されるか、すなわち「単純化 (simplification)」の様相ということが、キーワードとなる。

ヴォイス			アスベクト			その他の							インフォーマント(L・Y=男)					合計		
受身	可能	タイ	テイル	テシマ	テイク	テカル	マシ	ナイン	タ	ノダ	デス	タ	ウ	文末詞	L	A	T	M	Y	
非  過  去							ます す ませ ませ	ん ない  ない  ない						よ  よ よ よ よ よ よ	4 7 2 1 1 2 1 1 2 1 1 1	11 4 1 - 1 1 - - 1 - - -	8 11 6 - - - - - - - - -	1 - - - - - - - - - - -	1 - - - - - - - - - - -	25 22 9 1 1 3 1 1 8 2 1 1 1
							まし まし まし ませ ませ	た た た た た		の の の の の	です です です です です です です			よ  よ よ よ よ よ よ	6 1 - - - - - - - - -	7 - 9 1 1 - - - - -	21 10 - - - - - 1 6 1	- - - - - - - - - -	2 - - - - - - - - -	36 11 9 1 1 1 6 1
	られ						まし す ませ ませ	ん ない ない	た					よ  よ よ よ よ	- 1 1 - 1 - -	- 5 - - 1 - -	1 2 - 1 - -	- - - - - -	- - - - - -	1 8 1 1 1 1 1
		たい たい								の の の	です です です			よ  よ よ よ	- - - - -	2 1 1 1 1	- - - - -	- - - - -	- - - - -	2 1 1 1 1
			てい てい てい ている ている ている てい				まし す まし	ない  た		の の の の の	です です です です です			よ よ  よ よ	2 1 - 1 - 1 - 1 - 1	2 1 - 1 - - - - -	2 - 1 - - - - -	- - - - - - - -	- - - - - - - -	6 2 1 1 1 1 1 1 1
					ていか			ない			です			よ	- - - - -	1 - - - -	- - - - -	- - - - -	- - - - -	1 1 1 1 1
	合 計														38	58	74	2	3	175

その他(外数):

L: 速スキタンジヤインデスカネ

連レテイカレマシタスカ

降リテイツタサイ

A: ナクナレマシタ

聞イテウケタカサイ/コランナサイ

行ッタコトカナイデスカ

行ッテイデスヨ

T: オリマセンタツタヨネ

表1 丁寧体主文末の動詞のカテゴリー

	役	受身	イ	ス	ア	ス	ベ	ク	ト	テ	の	他	イ	インフォーマント(L・Y=男)					合計
														L	A	T	M	Y	
非 過 去												だろう	よ	11	13	2	24	33	83
														2	-	-	1	4	18
														-	-	-	2	2	2
														6	4	5	17	10	42
														5	-	5	8	-	18
過 去										ない	の だ の だ		よ	3	-	-	1	9	13
														2	-	-	-	1	3
														2	-	-	-	-	2
														9	11	8	19	12	59
														4	-	5	2	2	13
ヴ オ イ ス	られる られる られ									なかつ なかつ	た た た た の だ		よ	4	-	-	2	1	6
														1	-	-	4	1	3
														6	-	-	-	2	8
														3	-	2	-	1	6
														-	-	3	-	-	3
ア ス ベ ク ト										ない	の だ の だ		よ	1	-	1	-	3	5
														1	-	-	-	-	1
														4	2	2	-	2	10
														-	-	-	2	-	3
														-	1	1	-	-	1
複 合	られ られ られ させ									ない	の だ の だ		よ	11	1	3	11	14	40
														-	-	4	1	-	5
														2	-	-	-	-	2
														5	1	1	-	-	7
														1	-	-	-	-	1
合 計										なかつ	た た た た の だ		よ	2	2	6	15	5	30
														-	-	1	-	-	1
														6	-	-	-	-	6
														3	-	-	-	-	3
														1	-	-	-	-	1
ト										ない	の だ の だ		よ	1	-	-	1	-	2
														-	-	-	-	-	1
														1	-	2	-	-	1
														-	-	1	-	-	1
														1	-	-	-	-	1
合 計										ない	の だ の だ		よ	1	-	1	-	-	2
														-	-	-	-	-	1
														1	-	-	-	-	2
														2	-	-	-	-	2
														1	-	-	-	-	1
合 計										ない	の だ の だ		よ	107	36	81	108	104	436
														108	68	65	54	46	

その他(外数):

L: イカン/カナワナ/覚エタイ

飲ム/黙ッテロ/渡シテレル

飲モウカト思ッ

アガッカリスルンガ

モトヲレタ(尊敬)

見ナイホウガイ

下ケナ/イラッシャイ

A: 行ッタコトアル/オイネ

T: 行ッタコトナイ/聞イコトナイ

M: 行ッタコトアル/書イホウ

Y: 作ッタイナイ

ヤッテケルンガ

表2 常体主文末の動詞のカテゴリー

	L		A		T		M		Y		合 計		総 計
	丁寧体	常 体	丁寧体	常 体	丁寧体	常 体	丁寧体	常 体	丁寧体	常 体	丁寧体	常 体	
丁寧体/常体	41	119	64	38	75	83	2	110	3	106	185	456	641
文末詞	18	26	14	1	25	48	-	13	-	7	57	95	152
否定	3	2	1	-	15	-	-	-	-	-	19	2	21
ン	4	24	4	6	-	18	-	31	-	14	8	93	101
ナイ													
タ	9	44	20	13	42	37	-	40	2	22	73	156	229
ティル	6	21	6	4	3	27	-	27	-	19	15	98	113
デシマウ	-	15	-	-	-	-	-	-	-	-	-	15	15
テイク	2	1	1	-	-	-	-	-	-	1	3	2	5
テクル	-	4	-	-	-	4	-	1	-	-	-	9	9
可能	3	5	7	3	4	5	-	4	-	7	14	24	38
受け身	-	11	-	-	1	6	-	-	-	1	1	18	19
願望(タイ)	-	3	3	1	-	-	-	1	-	-	3	5	8
使役	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1
ノダ	6	25	20	1	-	2	-	1	-	13	26	42	68
(ダロ/デシヨ)ウ	8	-	5	-	4	-	1	-	-	2	18	2	20

表3 カテゴリー別用例分布一覧

	L		A		T		M		Y	
	丁寧	常	丁寧	常	丁寧	常	丁寧	常	丁寧	常
ヨ	7	6	8	-	14	20	-	4	-	7
ネ	6	15	-	1	-	-	-	9	-	-
ヨネ	-	-	-	-	10	26	-	-	-	-
ワネ	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
カ	2	1	6	-	-	-	-	-	-	-
カネ	2	1	-	-	1	1	-	-	-	-
ナ(ア)	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-
ゾ	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
モノ	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-

表4 文末詞一覧(丁寧:丁寧体,常:常体)

### 3.1. 聞き手配慮に関するカテゴリー

#### 3.1.1. 丁寧体と常体

まず、発話の内部構造をグローバルにコントロールしているかに見える、丁寧体形式（デス・マス）と常体形式の使用状況をまとめてみる。

(a) L・A・Tの3名は、その使用の割合は異なるものの、丁寧体と常体を切り替えている。それに対して、MとYはほぼ常体しか使っていない。MとYの丁寧体使用は、前者が112発話中2例（1.8%）、後者が109発話中3例（2.8%）にすぎない。ここでは性差は関与していない。

(b) 次にL・A・Tの用いている丁寧体の機能についてまとめると、LとAは、質問や確認要求など、聞き手指向の高い機能をもつ発話の場合に用いる度合いが高い（読点はポーズ、？は上昇調、[ ]内は渋谷の注記を示す。以下同様）。

- (1) あれ、内地の中でどうなりますか（L: 質問）
- (2) いつ、帰りますか（A: 同）
- (3) あれ飲み方があるんでしょ？（L: 確認要求）
- (4) 一つのお願ひ頼みます（A: 依頼）

このような場合Aは、

- (5) [家賃]毎月に払う？（A: 質問）

(6) あの一、[きびだんごは]りんごと同じ？ 違う？（A: 質問）  
 のような常体の疑問文も使っているが、Lの場合はすべて丁寧体であって例外がない。Lにはさらに、

- (7) 連れていかれましたか（L: 質問）

などの二重丁寧語使用例もある。

一方戦時中の経験を物語るなど、必ずしも聞き手の反応を要求する発話でない場合には、Aについて、

- (8) こどもたちも、弾に撃たれて死んだ（A）

のように常体になることが多く観察されるものの、聞き手指向発話と丁寧体の場合ほどの結び付きはない。

なおTについては、常体と丁寧体の使い分けをめぐる規則性は特に見出



せない。またヤップには、新たな話題を導入する場合に丁寧体に切り替えているかに見える話者がいたが、パラオでは、そのような談話操作のために丁寧語が活用されているケースはないようである。

(c) 最後にLとAだけが用いている素材敬語について一言すれば、

(9) 連れていかれましたですか (L = (7) )

(10) こっ、ちのおにいさんはね、軍属で、外南洋行つてなくなれました (A)

のように丁寧体のなかで使われるものがある一方、

(11) [先生は]もどれた (L: ただし調査者のことばの反復)

(12) 爆弾にも、なくなれた人もいる (A: 本稿の対象外)

などのように丁寧体以外でも用いられているので、丁寧語とは別の機能を果たすものとして捉えられている。

### 3.1.2. 伝達的なモダリティ

次に、文末詞に注目してみよう。表1、表2で「よ」として一括して示した文末詞の内訳を見ると、表4のようになる。ここからは、被調査者の個人差が著しい一方で、それぞれの形式の使用される順序には一定の含意スケールのようなものがあることが観察される。ただしその順序を決定している要因は、一様でない。

(a) まず、5名すべてが用いている形式はヨである。

(b) Tのワネ(14)やテ形についたAのネ(15)も一括してネ類とすれば、ネはY以外の4名が何らかのかたちで使っている形式となる。

(13) [その島に人は]もういないねー (L)

(14) わたくしだったらあんまりわからないわねー (T)

(15) 木曜日ここおいでね (A)

ただしMのネは定型性が高く、9例のうち6例がワカラナイネ、2例がワステタネである(もう一つはデキナイネ)。

(c) またカ、カネなどのカ類は、丁寧体のある程度使うことのできるL・A・Tの3名に見られる。14例のうち10例が、聞き手指向ということ

と連動した丁寧体の質問文、問い合わせ文での使用である。常体で使用された3例は、

(16) それ[終戦50周年記念日]が、もう、いつになるかね (L)

(17) あー、[畑で]なに作っていたかねわたしたち (T)

といった自身への問いかけであるか、次のような兵隊のことばの引用例である(残り1例はTの丁寧体での自問の例)。

(18) おまえなんかできるか (L)

(d) ヨネ以外の、ナ・ナア・ゾ・モノなどはLのみが用いている。

(19) 飲むとかなわんな (L)

(20) [かつおの値段]わすれちゃったなあ (L)

(21) 敵がやってきたらこいつらがやるんだぞ (L: 兵隊のことばの引用)

(22) 手もね、骨ばかりで皮がこうなってるんですも (L)

(e) Tのみが用いているヨネは定型性が高いもので、(23)のヨと同じように、聞き手の知らない話し手側の情報を伝える場合に使われている。

(23) ナンバートウ東京って呼ばれたよ、コロールなんか (T)

(24) ハワイ行った[居た? ]とき、night classとってましたよね、わたし (T)

(25) [公学校時代]暗算も、よく一、したよねー、わたしだったら (T)

(f) なおいずれかの文末詞が使われている発話は、L:27.5%、A:14.7%、T:46.2%、M:11.6%、Y:6.4%であり、MとYの発話は、丁寧体がないうえに文末詞も少ないという、聞き手配慮を明示するマーカーを発話末にもたない構造をなしている。両者は次のように間投助詞のネを使っているだけに、母語話者にとってはそのバランスの悪さが耳につく。

(26) もしあの人達が帰ったらね、ほかの人のうち、行く (M)

(27) 各村にね、あの一、昔話ある (Y)

### 3.2. 命題内容に関するカテゴリー

次に、命題内容に関するカテゴリーについて一瞥してみよう。

### 3.2.1. 極（肯定・否定）

まずナイヤンなどの、ほかに言い換えの手段あるいは表現手段のない肯定・否定表現から見てみよう。極については5名全員が、その表現形式の必要性を反映して、肯定・否定を表現する能力をもっている。ただし丁寧体におけるノダを下接しない否定の表現形式については、L・A・Tの間で以下のような違いが観察される。

(a) Aはマセンよりもナイデスという分析形式を多用する。

(28) あまりそうはたくさんいないです (A)

(b) マセンを用いるLでも、動詞部分が可能などの複合形式になった場合には、処理のプロセスが複雑になるからかナイデスに変わる<sup>2</sup>。

(29) a だれがその先生になるかわかりません (L)

b お父さん、お母さん日本語わかるんだったら、島語言えない  
す (L)

(c) Tはどのような場合にもマセンを専用している。また今回のデータで丁寧体の否定過去表現を用いているのはTのみで、その形式はマセンデシタであった。なお常体では、用例のないAを除いていずれの話者もナカタを用いている。

### 3.2.2. 各カテゴリーとその形式の使用度数

次に、表3によって、各文法カテゴリーの（ゼロ形式以外の）形式のうち2名以上で10例以上使っているものの使用度数を整理してみよう。次のようになる（カッコ内は属するカテゴリーと用例数）。

タ (229:テンス) > テイル (113:アスペクト) > ノダ (68:ムード)  
> 可能 (38:ヴォイス) > ウ (20:ムード) > 受け身 (19:ヴォイス)  
逆に何も後接しない単純ル形（辞書形）は83例（12.9%）であった。

これはもちろん談話の内容によって変わりうる text type variability (Ellis 1987) の一種であり、また先にも述べたように、それぞれの形式は必ずしも母語話者と同じ形・意味・機能で用いられているわけではないことにも注意しなければならないが、パラオの話者が用いた発話のもつ文

法カテゴリーの大まかな傾向をさぐることはできると思われる。

以下、すでに由井・渋谷（1996、由井担当）で考察されているテンス・アスペクト、およびそれと関連するテ補助動詞（テイク、テシマウ、テクル、テクレル、テオクなど）を除いたそれぞれのカテゴリーごとの特徴を、まとめてみることにしよう。

### 3.2.3. ヴォイス

(a) まず、5名の被調査者全員が用いているのは可能表現で、L 8例、A 10例、T 9例、M 4例、Y 7例と、どの話者も比較的生産的に用いている。このことには、

- ・受け身や使役と異なって視点の取り方が一定であること
- ・項の数が変わらないこと
- ・表層格の交替はあるものの、実際の発話のなかでは省略やハの代行などによって接辞付加といった処理だけによって表現できること
- ・意味、構文的に他の代替形式がないこと

などのことが、その使用を促進する要因になっているのかもしれない。なお可能表現の詳細については、ヤップの場合ではあるが、すでに渋谷(1995 b)としてまとめたことがあるのでここではこれ以上触れない。

(b) 次に受け身の使用例は、発話末についてはL 11例、T 7例、Y 1例（調査者のことばの反復）だけであり、採取の範囲を発話末以外に広げても、Lの5例、Aの1例、Tの1例が増えるに過ぎない。またこれらの受け身文26例の動詞の異なりと延べ数（カッコ内）を見ると、

L：（帳面に）ツケル、笑ウ（2）、ヤル（8）、飲マス、（～を～と）言ウ（食べ物）を取ル（＝奪う）、撃ツ（2）

A：撃ツ

T：ナグル（5）、見エル（＝見る）、（～を～と）呼ブ（2）

Y：オコル

のように、使用例の多いLとTについても同じ形の繰り返が多い。さらに、話題の影響かもしれないが、次の例のように、戦時中、学校を含め、

生活のなかでよく用いられたと推測される語彙が多く、用法も直接受け身に偏っている。

(30) みんなから笑われる (L)

(31) 民間はみんなやられたね (L)

(32) 指をこんなにしてなぐられるよ (T)

したがって受け身文については、様々な格パタンの場合があるとはいうものの、生産的に用いることができるのかどうかすぐには判断できない。定型的な受け身形式を多用している可能性も、考えなければならない。

(c) その他のヴォイス形式については、願望のタイがL・A・Mにわずかに見られ(計8例)、

(33) あの戦争はもう二度と見たくないね (L)

(34) もっと習いたいんです、日本語 (A)

使役はLが1回(さらに複文で1回)使用しているだけであった。

(35) あるお正月ね、酒飲まされたの (L)

(36) そのためにやめさせたり (L)

(d) なお受け身・使役いずれにも、(Tに限らず)発話を計画するなかでその使用を回避しているかに見える例があった。

(37) アンガウルはいーカ月、でー、アメリカの人は取れた[占領した]よね、アンガウル (T:受け身の回避)

(38) そんなとき先生は、[病弱だった]わたしに一、あのなにかうちのなかでしていたよ (T:使役の回避)

(39) あの一戦争のときみんなあのバベルダオブ行きなさいとゆったが (T:使役の回避)

(39) はこの地の日本語に直接話法が多いということとも関連している(渋谷1995a)。

### 3.3. 命題の捉え方に関するカテゴリー

対象とした発話のなかで使われた説明、判断のムード形式は、

(40) 高いカツオは70、75セントだろうと思うね (L)

のような語彙的なものを除けばノダとウ（ダロウ）だけである。また発話末以外を含めても、次の例があるに過ぎない。

(41) あれは酔っ払うはずはないと（笑い）（L）

目標言語にはワケダ：ヨウダ、ミタイダ、ラシイ、カモシレナイなど多様な形式があるにもかかわらず、使用された例はなかった。

以下、その頻度に違いはあるものの、5名すべてが用いているノダとウについて見てみよう。

### 3.3.1. ノダ

(a) まずノダについては、これまでMとYに比べて多様なカテゴリーを分化させていたL・A・T3名のうち、Tの用例が極めて少ないことに気が付く。これは、Tがノダが使えないというよりは、丁寧体で圧倒的にマスを使っていること（75例中72例、96.0%）がかかわっているからかもしれない。Tがマスを優先的に使おうとしていることは、他の被調査者と違って否定過去形式にマセンデシタを用いること（§3.2.1.）、あるいは、

(42) おりませんでしたよね（T）

のような形式からうかがわれるが、このようにマスを優先的に選択してしまえば、目標言語のなかでも話し手の性といった面や優勢なノデスと語順を異にするとといった点で特にマークされたマスノ、あるいは過剰に丁寧なマスノデスを使わない限り、次のようにノダの使用を控えざるをえなくなってしまうのである。（Jは日本人。）

(43) J: あ、補習科[公学校卒業後に入る学校]はコロールしかないんですか

T: はい、あれは。みんなコロール来ますよ。(cf. 来たんですよ)  
なおTの常体ノダ2例は、いずれもノが単独で使われたものである。

(44) 何を研究してるの（T）

(45) 毎朝、草をとったりまたほうきする[＝箒で掃く]の（T）  
ングは男性のみが使っているが、ノは男女の別なく用いられていて特に女性に偏るようなことはない。

(46) 奥さんも子供も全部あのむこうへ引き揚げたの (L)

(47) あの旗が、旗やってあの、上へ行くの (Y)

(b) 一方、聞き手配慮のための明示的なマーカーをほとんど使っていないかったMとYのうち、Yはパラオの事情をよそののわれわれに説明する際にいくつか使っているが、

(48) 今マルキョク[地名]のあのアバイ[集会所]があるんだ (Y)

(49) [男の人は]これ[カヌー]作るんだ (Y)

Mのほうはここでもやはり、命題の提示だけにとどまっている。

(50) タピオカもまだ、若いやつをとって食べる (M)

(51) [食べ物]一週間の分をとってガラルド[地名]来る (M)

### 3.3.2. ダロウ/デショウ

次に、ダロウ/デショウは全部で20例ほど使われているが、その大半は

(52) あんたも英語習ったでしょ? (A)

(53) 式があるだろ? (Y)

のように上昇調をとって確認要求などを表すものである。

(54) [日本語が]わかるでしょうね、50歳だと (L)

(55) [アイライにも公学校]ありましたでしょ (T)

など、蓋然性を表すものは6例 (L 4例、A・T各1例) に過ぎない。MやYは、ダロウ/デショウといった付属形式を使うよりも、むしろキットなどの副詞を用いて蓋然性を分析的に表現するのが普通のようなのである。

(56) きっとここらへんに新波止場がある (M)

(57) きっとこっち (Y)

いずれにしても判断のムードは、動詞の文法カテゴリーのなかでは最もふるわないもののようである。

#### 4. まとめ

以上本稿では、5名の被調査者のそれぞれ45分程度の談話資料に基づいて、パラオに残る日本語の動詞の文法カテゴリーを記述した。個人差にも留意しつつまとめると、次のようになる。

(a) 丁寧体と常体：丁寧体多用グループ（L・A・T）と常体中心グループ（M・Y）にわかれる。丁寧体グループには、聞き手指向発話で丁寧体が顕著になる被調査者（L・A）がある（§3.1.1.）。

(b) 文末詞：（頻度ではなく）用いる形式の種類について、被調査者間に、ネを使う者はヨも使うといった使用スケール（ヨ>ネ>ナ）が見出される。カは丁寧体多用グループのみが用いており、丁寧体の使用と連動しているかに見える（§3.1.2.）。

(c) 否定：特に問題はない（§3.2.1.）。

(d) ヴォイス：可能の使用度が最も高く、受け身・願望がそれに次ぐ。使役はLのみが用いている（§3.2.3.）。

(e) ムード：ノダは5名すべてが用いているものの、マスの使用が顕著なTと、命題のみの発話の多いMに使用例が少ない。判断のムードは、動詞のカテゴリーとしてはもっとも分節されていない（§3.3.）。

また分析のなかで見出した単純化の諸相を整理すると、以下のようになる。

(i) 文体面での単純化：丁寧体の使用少（M・Y）

(ii) 談話管理面での単純化：文末詞の使用少（M・Y）

(iii) 分析化：マセン→ナイデス（L・A）

キットによる蓋然性（M・Y）

(iv) チャンク（定型表現）：

L：受け身

T：文末詞ヨネ・否定辞マセン・受け身

M：特定動詞と文末詞の結び付き（ワカラナイネなど）

(v) 複雑な構文の回避：受け身・使役（Tなど）



今回分析の対象としたデータは、渋谷がパラオで集めたものだけに限ってみても、全体の10分の1程度である。しかもパラオには日系二世や他島出身者など多様な背景をもつ日本語話者がいるのだが、そのデータは全く用いていない。調査三年目には、テンス・アスペクトなど話の内容に左右されやすいカテゴリーのことに配慮して、話題の多様化をはかってデータを集めることも試みている。

また今回は発話構造の見取り図を描くことに終始し、被調査者のもつ中間言語の独自の体系、あるいは言語行動面での特徴などを考察することはしなかった。

いずれの分析も、今後の課題としたい。

#### [注]

- \*1 本稿は、平成8年度文部省科学研究費補助金・国際学術研究「旧統治領南洋群島に残存する日本語・日本文化の調査研究」（研究代表者土岐哲、課題番号06041070）の研究成果の一部である。
- \*2 Hayashi (1995) は、ポナペについても同様に、マセン・マセンデシタよりもナイデス・ナカッタデスのほうが優勢であることを報告している。ただしその理由としては、まだ幼かった当時の生徒たちに対して、教師や母語話者がフォーマルな前者よりもインフォーマルな後者を選択したためというインプットの条件に求めている。

#### 参考文献

- 渋谷勝己 (1995a) 「多くの借用語と高い日本語能力を保ち続ける人々」  
『月刊日本語』2月号
- (1995b) 「旧南洋群島に残存する日本語の可能表現」『無差』2  
京都外国語大学日本語学科
- 由井紀久子・渋谷勝己 (1996) 「第二言語維持・摩滅をめぐる諸問題」土曜こ  
とばの会配布資料
- Ellis, R. 1987 "Interlanguage variability in narrative discourse:  
style shifting in the use of the past tense". *Studies in  
Second Language Acquisition* 9: 1-20.
- Hayashi, B. 1995 Second language maintenance: the case of Japanese  
negation in Pohnpei. 『宮城学院女子大学人文社会学論叢』4